

現代小説では性が堂々と描かれます。私たちの関心も高い。性行動が人の生き方を示すと考える人さえいます。中には「どうだ！」と作家のスタンスを出す作品や、指南書に転用されそうなものも。他方、性を消費するための作品もあります。

言葉の鎧

千葉雅也さんの「デッドライン」(「新潮」9月号)も愛欲や性行為がたっぷり。主人公が性的マイノリティーの同性愛者というこ

鍵を握るのは「危うさ」です。線や円といった幾何学図形や動物のイメージを通して、従来の人間観の外部も暗示。言葉が伝わらない、表現しきれないなど言語化の危機も。加えて、大小さまざまな事態の危機も発生します。

あなたの生活に文学を

阿部 公彦

とで、その作法も詳述されます。はじめは男女関係との違いが目につきませんが、次第に両者に通底するものが見えてくる。

「思弁」はしよせん、言いつくすための道具。分析し説明し、言いくるめて勝つ。小説はそうした勝ち負けとは別のフィールドにあるのでは? という。

主人公は現代哲学を専攻する大学院生。思想家の著作を精読し、他者や欲望といったテーマに切りこみます。そんな研究のプロセスと大学生活とが、彼の性行動と併せて描かれる。なぜ自分は男性を欲望するのか、との問いは研究テーマとも重なりま

「僕は僕自身を、単純にそのままの全体で生きることができない。バラしてから操っている」といった主人公の想念も、結局、シャープでカッコイイ言葉に落ち着くのか。強面で、勝つ言葉のおいしげは、しかし、油断してはいけない。彼が出会い系で知り合った男や親友にどんな

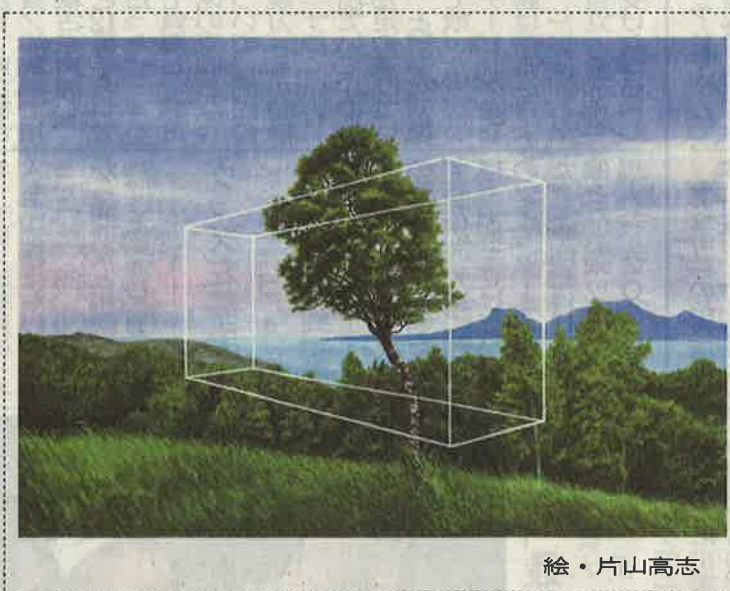
語るより語られたい快樂

千葉 雅也
デッドライン

目に遭わされるかは見物です。最後は父の破産とともに現実が突きつけられる。親の援助がなければ、思弁も何もない。

重ね塗り

木村紅美さんの「夜の底の兎」(「群像」9月号)も力作です。冒頭、いきなりの事実婚のパートナーの浮気が発覚しますが、いったん舞台は30年前の「蔵」へ。主人公はそこで障害者の女



絵・片山高志

だというこの中国哲学者に、急所を言い当てられるときの「僕」の興奮ぶりもよい。なるほど「僕」は語るより「語られたい」。小説を書く行為の根本にあるマゾヒズムです。立場表明よりも、言葉の鎧を脱いで脆弱さをさらし、語られる快樂に身を震わせる。なぜこの作品が小説になろう

好意や嫌悪を抱く温度感

木村 紅美
夜の底の兎

広がる。後半、物語は意外な展開を見せます。ゆめちゃんの介護者として知り合った「新沼さん」なる女性が自分に急接近、その何ともつとつしい息づかいが克明に描写されます。人が人に好意や嫌悪感を抱く温度感。この作家の得意な領域です。語るより、物そのものと同化するような言葉の重ね塗りが効く。その向こうにかすかな陽射しも感じさせる作品です。

島田雅彦さんの私小説「君が異端だった頃」(集英社)が刊行されました。この世から消える前に脳の「秘密」を公開するとの言葉に違わず、名物編集者や、埴谷雄高、大岡昇平から大江健三郎、柄谷行人をへて中上健次、佐伯一夫へと至る作家批評家たちの、あつと驚くエピソード群。毎ページに最低三つくらいのスマートなギャグあり。米國滞在で知り合った女性が日本まで追いかけてきて家庭崩壊寸前となる顛末には、第一級のストーリー性もありました。

自己分析、文学論、時代評、人物寸評…これだけの内容を一冊に封じ込めつつ、文章のペースが全く揺るがない。ホッとした展開もクールな分析も驚くほどの禁欲的安定感で統合され、コメディイ感たっぷりなのに叙事詩のような荘厳さも持つ不思議な作品です。

(英米文学者)
11月1日掲載